

「米軍のアフガニスタンからの撤退 私たちが考えるべきこと」 2021年09月27日

『週刊金曜日』の9月24日号の「論考」に、私の投書が掲載されたので、転載したい。

〈米軍は、アフガニスタン（以下、アフガン）における20年間のタリバンとの戦争に勝利することはできず、撤退した。〉

雑誌『フォーブス』の報道によれば、アフガンでは2500人以上の米軍兵士が死亡し、4000人近くの米国の民間人の契約者が死亡した。さらに約6万9000人のアフガン軍の警察や約4万7000人の民間人が犠牲となり、約5万1000人の反政府勢力の兵士が死亡したという。また、米ブラウン大学の試算によれば、直接の戦闘費用とアフガン軍の訓練費用などの総額は、2兆2600億ドル（約247兆円）と見積もっている。実に日本の国家予算の2年以上にあたる。

これだけの犠牲を払い、米国は、アフガンをテロ組織の巣窟にならないよう民主国家にしようとした。が、米国の説く民主主義を受け入れることができず、権力を持った人々に腐敗と汚職が満延し、民衆の支持を得ることができなかつたのだ。

米国の最も長い戦争は全面撤退という形で終わった。プリンケン国務長官は、「軍事的関りは終わり、外交的な関りになっていく」と言い、バイデン大統領は「最高の撤退作戦だった」言う。だが、米国の身勝手と敗北の醜態以外の何ものでもない。ベトナムのサイゴン陥落時の映像と重なって見える。

一方、タリバンは戦争前、暴力的に治める恐怖政治で支配していた。よく知られるように女性の人権を認めず、イスラム法の名の下で、刑罰も残酷をきわめた。

米軍などに協力したアフガン人は、タリバンに弾圧されるという恐怖が広がり、関係した国々に脱出したいと懸命となった。カブール空港で、離陸する飛行機にしがみ付き、飛び立った飛行機から落ちて死んだ姿は衝撃的だった。

これらの悲劇的混乱は、米軍の空爆は圧倒的であるが、それだけでは決着できないことを示している。ベトナム戦争、旧ソ連によるアフガン侵攻、今回のアフガン戦争は、超大国の敗北で終わっている。この事実の世界史的意味は限りなく大きい。

日本の小泉純一郎政権は、アフガン戦争を支持し、テロ対策特措法によって、アメリカ海軍艦艇などへの洋上燃料補給を実施した。日本もまたアフガン戦争の当事国なのである。今一度、アフガンに命をささげた故・中村哲医師の「武力で平和は実現しない」という言葉をかみしめたいと思う。

今後、タリバンがどんな国造りをするか不明であるが、米軍などに協力したアフガン人に報復しないでほしい。また、国外脱出を求める人には、当事国は力を尽くして、出国させる責務がある。日本に助けを求める人が500人以上いると報道されている。〉

アフガンは豊かで、穏やかな国であった。1978年に旧ソ連軍が侵攻してきて、激しい戦火を10年間も交え、ムジャー・ヒディーンはゲリラ戦を展開し、ソ連軍を撤退させた。そして、2001年に、タリバン掃討を名目に米軍と多国籍軍が進駐し、20年に亘って戦争をし、米軍と多国籍軍は大きな犠牲を払い、何も得ることなく撤退した。アフガンは数十年に亘って、戦争に明け暮れた訳である。この間、多くの戦死者を出し、国は疲弊し、国民はどれほどの悲しみの涙を流したことか。大国の思惑によって起こす戦争の虚しさ、人間の愚かさをさらけ出した。他国に軍隊を駐屯させることは、その国の主権を侵害することであるという常識を世界は認識すべきである。主イエスは「剣を取る者皆、剣で滅びる」と言われた。剣は、自分も他人も幸せにはしない。